



面白さについて

上原先生からリレーを引き継ぎました火原です。前号の「1枚の写真」は、自身の分析化学原体験を示されており、興味深いものでした。しかも、「堅苦しい話題はダメ」や「分析化学の雰囲気を」など、後続の執筆者(たち)に指針(圧力)まで頂きました。筆者は気軽な話題を無難に平易に書くのが苦手です。気軽にものを考えると、周りからみれば突飛な発想に至るようで、よくひんしゅくや失笑をかい、叱責すら受けます。特に、筆者のたとえ話は不評の極みです。

筆者はスポーツ観戦しながら、競技の本質的部分を推察するのが趣味です。大学生時代に、フィギュアスケートをテレビで観ながら、面白さを推察しましたが、なかなか困難でした。選手が、色々な経緯の末に「必殺技」を繰り出す姿をみて、「なんだかプロレスみたいだな〜。」と思っていたところ、トーニャ・ハーディングなる人物が「ライバル蹴落とし裏工作疑惑」や「シューズ紐切れ騒動」などで大暴れて世を騒がせました。「なんだ、やっぱり本質はスター性か。ちゃんと悪役までいるよ。」などと思い、「フィギュアスケート=プロレス仮説(FP仮説)」という何の役にも立たない仮説を主張し、友人たちの批判に晒されました。

最近では、スポーツ観戦の趣味のメインは「サッカー」と「野球」です。サッカーの魅力の第一は、手を使わずにボールをゴールに運ぶ、という競技の単純さにあると思います。また、様々な戦術と戦略の巧みさが競技に深みを加えています。「筋の通った単純な体系に、複雑な技巧が加わる」のが『サッカー的面白さ』と思っています。

これに対し、野球は初心者には複雑な競技です。「振り逃げ」「投球ルール」「タッチアップ」など、特例山盛りです。一旦理解してしまえば、「打つ」「走る」「投げる」といった要素が重要で、瞬発力や動体視力といったプリミティブな身体能力がプレーの良し悪しを決めることがわかり、面白さが深まります。「複雑で多様な枠組みの中で、単純な点が光る」のが『野球的面白さ』だと思っています。

最近世間では、サッカーの人气が野球に対して優勢のようです。男の子に最も人気のスポーツは、サッカーと聞いています。この一因に『面白さ』の質と伝え方の違いがあると考えています。初心者にとって、サッカーは枠組みが単純でわかりやすく、野球は枠組みが複雑わかりにくいと思います。『野球的面白さ』を伝えるには、工夫と地道な努力が必要なのでしょう。これを端折って、「まあ良い選手だね」ぐらいの選手を即席スターに仕立て、マスメディアを利用して一発逆転を狙おうものなら、FP仮説的状况に陥ること必定です。

筆者は、かくも他愛もないことを日々考えていますが、学会の仕事面では「若手の会幹事」などという肩書きを持つ程度に歳をとりました。2007年度の全国若手交流会は、関東支部の受け持ちで、著者も幹事の一員と

して1泊の交流会に参加しました。その会の話題の一つに「分析化学の面白さをどう伝えるのか？」が挙がりました。学部生の研究室配属や大学院入試などで、分析化学講座の人気を少しでも高めたいという問題意識です。別の言い方をすれば、有機化学や物理化学の研究室などと比べて、魅力的分野であることをどう宣伝するかということです。

当然ながら、普段の講義で分野の面白さを伝えるのが最良の方法です。皆様の悩みは、「機器分析の項目になると、原理も対象も各論的で、体系的な物言いが難しい」ということでした。研究室の卒業研究となると、分析原理や装置の研究が多いため、この種の研究の面白さを伝えなければなりません。化学系学生には容易に伝わりません。「むむっ、これはまさしく野球的窮状だ。」というわけで、性懲りもなく「分析=野球 有機=サッカー仮説(ABOS仮説)」をここに提唱します。例によって、役に立たず、批判的になるだけの仮説です。

若手交流会でも議論しましたが、良案は現れませんでした。結局、「それでは分析化学を端的に表すコンセプトは何か？」という煮詰まった話になり、「計測するマインドだ」などと筆者が言うと、妙に納得する先生が現れました。ダメです。「野球は足腰だ」というのに近く、わかる人にしかわかりません。

さて、ABOS仮説を立てたのだから、野球界に答えを求めにいこうと思い、Web検索しました。「野球人気復権のためもっと巨人を応援しよう」という因果と相関を取り違えたような面白いタイトルはありましたが、筆者の納得いく案は発見できませんでした。一方のサッカーをみてみますと、「地方を含めたサッカー設備整備」「プロにまで繋がる人材育成組織」「社会貢献活動」など、着々とインフラ整備が進んでいる模様です。これならば人材が集まるはずですよ。

「分析化学」とってのインフラとは何でしょうか？大学3年生ぐらいまでに限って言えば、それは教科書だろうと思います。名古屋大学 渡慶次 学先生の「学会・業界を挙げての初学者のための教科書」という意見(「ぶんせき」2006年11号 p. 591)に賛成です。加えるならば、この教科書の英語版も欲しいことと、網羅的(全集的)教科書もあってよいと思います。これらは非常に労力のかかるイバラの道です。有機化学の「こんな分子が合成できて面白い」というサッカー論理に対し、「多様・多彩な分析手法それぞれがこんなに面白い」という野球論理で対抗することが、将来の優秀な人材確保に繋がるかもしれません。

最後に、有機化学・野球・サッカー・フィギュアスケート・プロレスに何の恨みもありません。念のため。今回は久本秀明先生(大阪府立大学)にお願ひしました。

[東京大学生産技術研究所 火原彰秀]